

それでは、ある研究文献において、あるテキストの全文が引用されている場合はどうであろうか。このような場合、「本編」ではすべて「引用言及」として処理されている。

たとえば、[0319] [0321] に連載された上野景福「Lewis Carroll の 'Doublets' 市河博士の手写原稿から」（なお「本編」の当該書誌データ中の表記“市川博士”は誤りであり、正しくは“市河博士”である。）においては、Doublets の「引用言及」関係指示は存在するが、「テキスト」関係指示は存在しない。けれどもこの文献は、Vanity Fair 誌に掲載された Doublets に関する市河三喜博士の調査をもとに、それまで同誌以外に再録されることのなかった sets を多数収録しているのである。したがってここでは、Doublets を単なる引用として処理するだけでは不十分であり、「テキスト」としての重要性も考慮する必要があると思われる。

「本編」の関係構造指示は、現時点では、これに対応する機能を有しない。すなわち、「本編」の関係構造指示の論理的妥当性には明らかに重大な欠陥が存在するのである。

その対策としては様々な方法が考えられるが、従来の構造を最大限に利用しようとするならば、「引用」という視点をその核として採用することにある程度の有効性が期待できるように思われる。すなわち、従来の「テキスト」関係は「他者によるテキスト全文の引用」という特殊な引用形態として解釈することが可能であるし、同様に、従来の「異版」関係は「自身によるテキスト全文の引用」という特殊な引用形態として解釈することが可能である。このようにして、文献間の関係はすべてそれぞれに固有な偏差を伴った引用・被引用関係に還元することが可能となる。さらに、引用の質的および量的関係を制御する適切な表現モデルを構築できるならば、従来の欠陥も解消されよう。

なお、「本編」には実際には「本編」との記載はなく、タイトルページには単に「第1版」とのみ表記されている。本稿において当該文献に対し「本編」の呼称を用いたのは、同「補遺」における用例に倣ったものである。

「本編」については、その内容には直接の関係はないが、以下の点を言い添えておきたい。まず、タイトルページ下部に引用された文章についてであるが、引用する際の礼儀上、その出典（Through the Looking-Glass. Chapter 1）を明らかにしておくべきであったろう。次に、奥付についてであるが、どういう原因によるのか、奥付を欠く状態で頒布されたものが何点か存在することが判明している。この機会に、掲載された奥付を以下に再現してみる。（ただし、写真複製等ではないため、字体や寸法は現物とは必ずしも一致しないことに注意すること。また、住所は1991年当時のものであり、同氏の現住所とは異なることに注意。）

日本における Charles Lutwidge Dodgson 関係文献目録

1991年5月4日 第1版発行

編集・発行 小原俊一

〒231 神奈川県横浜市中区打越77-2F-W